子種石

八王子市　瀬沼　和重

さて、子種石とは何だろう。此れは昔々のお話です。昔はお嫁さんに行って、三年たっても子供が出来ないと、そのお嫁さんは実家に帰されたそうだ。

ある時、娘さんが嫁に行って二年も経つのに、子供が出来なかったから色々と心配している、という話があったそうだ。その話を聞いた近所のおばあさんが、

「近くの神社の所にな、子種石があるでな。その子種石にお参りしてな。それはな、この石を抱いたり、なぜたりすると御利益があってな、赤ちゃんが生まれるそうだ。」

と言っているのを聞きました。一寸心配だが、思い切って、そして恥ずかしいが、その子種石を抱いたり、なぜたりした。

そして何ヶ月かが過ぎたが、一向にそれらしい事は無かった。ついに三年が過ぎてしまい、嫁さんは実家に帰されてしまった。実家に帰されてしまった娘は、お母さんと共に、一生懸命仕事を手伝いました。

その姿を見ていた近所の青年から、

「是非とも私の嫁さんに。」

と言われました。しかし、これこれこんな事情がありますと話すと、

「良く働き一生懸命頑張っている姿を見て、私は心を惹かれました。」

と言うので、ついに二人はめでたく結婚をしました。

その後二人は一生懸命頑張って働いた。だが、半年ぐらいすると、嫁さんの体調がおかしいと話をしていると、それから少しして、赤ちゃんが生まれた。

さあ家族一同喜んだ。それから二人、いや三人と子宝に恵まれて、それは、それは楽しい家族生活を送られたそうです。

これこそ困った時の神頼み。それからは平和な家族を築いたそうです。

（終わり）

各地に残る子種石伝説

高尾山の昆虫

オオゴマダラエダシャク

蝶と蛾の違いについてはいろいろ語られていて、「一般的に蝶は昼間に活動し、蛾は夜間に活動する」や「蝶は綺麗な色彩をしているが、蛾は地味な感じが多い」、というものは当たっていますが、例外も少なくありません。

蝶でも薄暗い場所を好むジャノメチョウやコノマチョウの仲間、そして蝶と蛾の中間のようなセセリチョウは地味ですし、蛾でも昼間に活動するアゲハモドキを始め、やや目立つ体色の種は存在します。

オオゴマダラエダシャクは綺麗な蛾で、白地に茶色のゴマダラ模様が美しい大型のシャクガです。

胴体は濃い茶色とオレンジが規則正しく並ぶ縞々の配色で、全体的に清楚な印象があり、ぱっと眼には蝶を思わせます。

幼虫は所謂シャクトリムシで独特の動きで知られており、食草はカキノキであり、関東以南に広く分布しています。

高尾では夏季に灯火でその姿をよく見かけ、ややもすると毒々しいイメージの他の蛾とは異なり清涼感を漂わせ異彩を放つ存在です。

（文　松島　孝　撮影　加藤　真澄）

おはなし散歩道

菊が舞う

湯沢町　富樫あい子

野菊が咲く陰暦の九月九日は重陽の節句です。

この日、菊酒を飲んで邪気を払い、長寿を祈る習わしがありました。

節句の日の夕方、タケ爺は菊、一枝と酒に菊の花びらを浮かせた菊酒を、カゴにしょって高尾山を登ってきました。

去年までは六十数年連れ添ったヨネ婆と一緒でした。

今年はひとりです。

ヨネ婆が、昨年の暮れ死んでしまったからです。

毎年、重陽の節句を楽しみにしていたのに……

「来年もくるべぇ。おら死ぬこと忘れただハハア」

九十歳近いヨネ婆は、大笑いしていたのです。

汗をふき、タケ爺は、

「婆も一緒だといいのになぁ」

といいながら、ヨイコラ、ヨイコラ、かけ声をかけて山頂に登ってきました。

遠く富士山が夕日に輝き、稲穂が武州の平野を金色に染めていました。

タケ爺の村が見渡せます。田んぼの中にヨネ婆が眠る森も見えます。

タケ爺は、さっそく薬王院に菊酒を供え、

「ナムイヅナダイゴンゲン……」と唱えました。

ヨネ婆に節句の思いが通じますようにと祈りました。

タケ爺は、山頂に戻り村の景色が眺められる場所にゴザを敷き、自分の真向いに一枝の菊を供えました。

ヨネ婆が好きだった菊の花びらを茹でた酢の物を酒の肴にと、そこに置きました。

「婆のようにうまく出来ないが、わしが作ったべぇ。さあ一杯！」

タケ爺はヨネ婆が一緒にいるような気持ちで菊酒を注ぎました。

「婆よ、一緒に飲もう」

菊酒を一口飲んでは酢の物をつまみ、ヨネ婆に話しかけ、また一口飲む、

「そろそろ帰ろうかのぉ」

タケ爺が立ち上がると風に吹かれるかげろうのように女の人影が……

「おぉ！　おまえは！」

タケ爺は驚きました。

女はしゃべりません。菊酒をすすめますが、扇を繰り返しています。

そのうちに日は西に沈み、月がタケ爺を照らしています。ムササビが枝から枝に飛ぶ音が聞こえます。

しばらくして、月が雲に消えかけたとき、

で顔をかくし、香りをたしなみ、ゴザの上の菊、一枝を持つと舞い始めました。

大杉から篠笛が静かに鳴り出し、朗々とした唱が山頂に響きます。

〜人は一日に千里を行くことは出来ないけれど、魂は行く事が出来る〜

女が舞う菊の花びらが山頂に舞い散ります。

〜夜風に乗って菊酒を楽しみにきたのです〜……

タケ爺の目から、はらはらと涙が落ちました。

みごとな舞です。

女は静かに座り、

〜……これでお別れです〜　と両手をついて消えてしまいました。

タケ爺はあわてて引き止めようとしましたが、月明かりもなく目がくらみ、どこに行ったか分かりません。

タケ爺は、涙が止まりません。

大杉の枝が大きく揺れました。

「祈りが届き、思いが通じたのだ。けなげなる心に精進せよ」

タケ爺は、夜空にすいこまれていく声に耳を澄まし、いつまでも天を仰いでいました。

（おわり）

（さし絵・小出　茂）